

⑪マスコミ・出版界における差別事件

コアマガジン社発行の『別冊BUBKA』が二〇〇五年の一二月号に、京都府内の在日部落・被差別部落に対する偏見を煽る写真と記事を掲載した事件が発覚している。掲載された写真は、子どもたちが特定できるものまでであった。事件発覚後の二回の事情聴取のなかで編集長は、「雑誌で部落問題はタブー化されていたが、そろそろいいのではないかと思いこの特集を組んだ」こと、「部落問題についての知識は『同和利権の真相』等から仕入れた」ことを明らかにしている。現地での取材の印象については、親切に対応してくれた人がいたと述べているが、雑誌には「擦れ違うたびに住民からキツイ視線が…。怖い」と書かれており、「同和利権」の根拠についても記事内容の確認をとっていないという事実の曲解が明らかにされている。

また、一昨年度版で紹介したテレビ朝日の「サンデープロジェクト」差別放送事件では、その後、テレビ朝日代表取締役社長名で文書を出している。内容は、「複数の出演者から一連の差別発言がなされました。これらの言葉は発言者の真意以前に、決して許されない人権侵害の暴言であった」との認識を示し、「多くの視聴者に対しても被差別部落に対する誤った印象を与える結果となってしまいました。ここに深く陳謝いたします」とし、「なぜあのような差別発言がなされたのか。差別は犯罪であるという揺るぎない意識が出演者やスタッフの間に定着していたのか。取材を通し状況を十分理解しているという、気の緩みはなかったのか。内に潜む差別意識が露呈したものではなかったのか。社内では現在、さまざまなレベルで論議が続けられております。またそれらの検討に際し、メディアは社会的弱者にどのように向き合うべきかを改めて認識するよう、スタッフに指示しました」と一連の差別発言の生まれた背景分析と取り組みを明らかにしている。